

被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁

自然と共生、風光明媚な場 海に見える命の森

相馬市・(株)広栄土木代表取締役の小幡さん

宮城県仙台二華中学校・高等学校

伝承ロードをゆく 第3回 福島県相馬郡新地町・相馬市・南相馬市

仙台市・HOPE FOR project

震災の伝承も使命・岩手県大船渡市

道の駅東松島

宮城県・南三陸町国際交流協会理事の佐藤さん

自然と共生、風光明媚な場

海の見える命の森

宮城県南三陸町志津川の小高い山の尾根に広がるのが、第3分類の震災伝承施設「海の見える命の森」。山はリアス海岸特有の海のそばまで迫り、ラムサール条約登録湿地の志津川湾と湾内のシンボル荒島が一望。風光明媚な光景を見下ろすように、「南三陸大仏」が鎮座します。毎年3月11日には慰霊を込め、大仏がライトアップされます。

海の見える命の森は、麓にある「南三陸ホテル観洋」を運営する阿部長商店(気仙沼市)の所有地です。志津川地区は東日本大震災で津波の甚大な被害に遭い、同ホテルもスタッフによる語り部バスを行うなど震災伝承に熱心に取り組んでいます。

ホテルから国道45号を少し歩き、階段を上ること約10分で森のメインスポットの第一展望広場に着きます。山側を通じる古道の気仙街道を活用した「みちのく潮風トレイル」からも森に行けます。森に到着すると、天気の良い日は志津川湾の絶景が迎えてくれます。

森は元々、雑木林でした。震災後の2012年から多く

の有志やボランティアらの協力を得て整備を開始し、様々な植樹を進めてきました。来訪者が自然と触れ合える観光スポットや住民の憩いの場、花見や紅葉狩りが楽しめる地域の遊歩道になれるよう、16年に「海の見える命の森プロジェクト」がスタート。さらなる整備に取り組んできました。

海を望む南三陸大仏

森は標高約80mのエリアに広がり第一、第二、中央、山頂の各展望広場を開設。第一と第二の間には細い渓谷もあります。「総合学習の場」「観光資源」「祈りの場」という三つの目的があり、海に最も近い第一展望広場には、阿部長商店が仕事でつながりのある

ミャンマーから贈られた南三陸大仏が設置されました。

大仏は大理石製で台座も含め約5mの高さ。海に向かって鎮座し、台座の幅も約3mあり、森のシンボルとなっています。

大仏の設置には延べ800人ほどのボランティアが関わったそうです。付近には備災体験伝承プログラム用の石窯やかまどを設けた小屋、災害時にも役立つ人間の排せつ物を微生物の働きによって分解・処理するバイオトイレも男女別に設置。これらの施設もボランティアの手作りで災害時の避難場所でもあります。

展示や語り部による説明などを主体とした震災伝承施設とは異なり、防災や震災伝承はもちろん人と自然との持続可能な共生を目指す森として、若者らを中心にさらなる活用が期待されます。



慰霊を込めて志津川湾に向かって鎮座する「南三陸大仏」

さまざまな自然体験の場に

三陸復興観光コンシェルジュセンター長の阿部寛行さん

海に見える命の森は多くの

ボランティアらの手によって整備されてきたほか、「総合学習の場」「観光資源」としての機能を持ち、さまざまな自然体験プログラムの場としても利用されています。これらの活動をサポートするのが、三陸復興観光コンシェルジュセンター長の阿部寛行さん。海見える命の森プロジェクトのスタート時は副実行委員長として活躍。今も実行委員として森をフィールドに活動を

繰り返しています。

阿部さんは「一人一人のつながりを大切に3歳から86歳まで、1万3000人を超えるボランティアとともに森を造り上げてきました」と振り返ります。雑木林だった森の豊かな自然を生かしつつ、手造りの整備を図ってきただけに、ボランティアはもちろん関係者の努力は並大抵ではなく、「满身創痍(そうい)でした」と語ります。当初は森の整備と桜の植樹が主体でしたが、大仏や小屋の

設置が加わったことで電気や水、道路も必要となりました。

本格的な整備が始まってから9年。阿部さんは万感の思いで森を見渡します。

同センターは若者を中心に災害に備える「備災」の意識を養ってほしいと、さまざまな体験プログラムを提供しています。森の本格的な整備が始まった2016年にボランティアの受け皿として設立されました。

「備災」の浸透を図る

阿部さんは仙台市出身。自然体験を主体とした放課後児童クラブの運営などに携わり、海洋活動で南三陸町にもたびたび足を運んでいました。東日本大震災の発生時には仙台市泉区の自宅を拠点に支援活動に取り組み、宮城県内38カ所の被災地に物資を届けたり、それまでの活動で知り合った全国の仲間らの支援の取りまとめに当たったりしました。

災害時の支援活動に取り組



手造りの避難小屋のデッキから望む志津川湾

んできた経験があるだけに、震災時には「これまで何をしていたのだと喪失感の塊に陥った」と阿部さん。「想定外という言葉が飛び交いましたが、自分がそれまでしてきたことを否定されたような気がしました」と振り返ります。

一方で「自然体験は楽しさだけを伝えてきました。人類が自然を凌駕(りょうが)したと思いがっちはいけない。自然と向き合うことで、あらためて気付いたり、分かったりすることがあります」と、気仙沼市小泉地区に居を移して震災ボランティアや体験学習の活動に当たり、センターの立ち上げにつながりました。



後世に伝えようと津波避難の大切さを刻んだ石碑も設置

阿部さんは「日常の中で備えなければなりません。さまざまな活動を通じて『備災』という言葉の定着を図りたい」と強調。これまで森の活動に参加したボランティアにも、この言葉を発信してきました。「植樹した桜は千年咲き続けるといいです。海に見える命の森が、震災を千年後まで伝え続けられる場になれば」と話します。

自然体験プログラムは整備ボランティアが無料でピザ窯やかまどをそれぞれ使った体験とクロモジ茶作りが各2200円、バーベキューは2700円。小学生以上が対象。問い合わせは阿部さん070(5018)1023へ。申し込みはメール sanrikukankko0311@gmail.com



自然体験を通して災害への備えの大切さを呼び掛ける阿部さん

思いを
((発信))

震災乗り越えた足跡を語る

相馬市・(株)広栄土木代表取締役の小幡さん

生まれ育った相馬市への熱い思いは誰にも負けません。同市の(株)広栄土木代表取締役の小幡広宣さんは、東日本大震災前から同級生らとともに地域美化活動に取り組み、震災後は本業を通じて復旧・復興事業に携わったほか、ボランティア活動に力を入れました。今は語り部としても活躍し、防災の大切さや震災をどのように乗り越えてきたのかを伝えていきます。



小幡広宣さん



首都圏の学校で生徒たちに震災時の様子などを語る小幡さん

小幡さんは震災時、相馬市原釜の自宅が津波の直撃を受けました。家族全員は無事に避難。津波襲来の様子を目の当たりにし「相馬はこれで終わった」と思ったそうです。翌日からがれき撤去に乗り出しましたが、周囲の住宅が跡形もなく流失した中、原形をとどめたままの自宅を見て、「自分でできることは何か」と考え、ボランティア活動を始めました。

泥やがれきの撤去をはじめ、山に犬の避難所の開設、小中学校の校庭での放射線測定、東京へ毎週末に向き、街頭で募金を呼び掛けるなど、実にさまざまな活動を繰り返し広げました。

東京電力福島第一原発事故の影響で、相馬市はもちろん福島県産の水産物や農産物は大きな打撃を受けました。小幡さんは一般社団法人「そまま食べる通信」を立ち上げ、2015年から20年まで3か月に1回、通算20号を発刊しました。

相馬市復興視察ツアーが始まった5、6年ほど前からは語り部としても活動しています。ツアーでは市内の被災地や震災伝承施設などを見学。小幡さんは自宅があった場所に近い相馬市伝承鎮魂祈念館や、市中心部にある観光交流拠点の同市千客万来館などで語り部を行っています。

「無駄に怖がらない」

首都圏での震災をテーマにした講演会やパネルディスカッションに、講師やパネリストとしても招かれてきました。「被害の状態や災害への備えの大切さを訴えることもさることながら、近頃は震災をどう乗り越えてきたのか、どう挑んできたのかというテーマにシフトするようになりました」と言います。

地震や津波はいつ発生するのか分かりません。小幡さんは「無駄に怖がる必要はない」ときっぱり。「大規模災害は外からの支援が遅くなります。発生から数日間は自分たちで乗り越えなければいけません。」



震災後は東京へ向かい、募金活動を行った

そのためにも自助、共助の在り方を見つめてほしい」と強調します。

悲しかった、つらかった話から挑み、乗り越え、そこから得た知見や心構えの話へ。「聞き手の反応が良くなりました」と小幡さんは手応えを感じています。

震災伝承については「外への発信も必要かと思いますが、実は被災地に住む私たちが震災を忘れつつあるのでは。次世代につなぐ前に、あらためて自分たちがあの日のこと、それからのことを振り返るのが必要」と話します。

「震災伝承施設も、むしろ被災地の人たちがもつと足を運んでもいいのでは」と小幡さん。「大切なのは被災地の私たちが忘れないこと。家庭で折に触れて震災を振り返れば、子どもたちにも自然とつながっていくはず」と語ります。

震災伝承施設の紹介本を作成

宮城県仙台二華中学校・高等学校

中高一貫教育の宮城県仙台二華中学校・高等学校（佐藤弘人校長）では「GS（グローバルスタディ）課題研究」の授業で、グループごとに国内外のさまざまな課題を掘り下げて学んでいます。高校2年生の1グループは、東日本大震災の伝承施設を紹介するガイド本を作成。フィリピンと日本で行われた国際会議で発表しました。

ガイド本は2年生の伊藤哲さん、高橋俊人さん、地主樹さんのグループが作成。東北大学災害科学国際研究所の小野裕一教授から提案を受け、2024年の夏頃に本格的に執筆を始めました。

情報量で知られる旅行ガイドブック「地球の歩き方」のような読み応えを目指し、本は「防災ミュージアムの歩き方」と名付けました。

25年1月現在、宮城、福島、岩手3県の約70の防災ミュージアムを調べ、基本データ、概要、写真をWordソフトでまとめました。実際に訪ねた施設もあります。



フィリピンでは英語で発表

地主さんは「見やすいうレイアウトを考えるのが大変でした」と苦労を明かします。高橋さんは「民間の施設は存続のため、展示などで工夫してい

ると感じました」と語ります。

フィリピンで本を紹介

震災当時は3歳だった3人。保育園にいた地主さんは迎えに来た親戚と車中で一晩過ごしました。伊藤さんはパン店で家族と買い物中で、パンを買ったら揺れて、店がある高台から街の様子を見ていました。高橋さんは「家族と車で避難しました」と、それぞれ断片的な記憶を覚えてくれました。

震災を知らない世代が増える中、伊藤さんは「伝承施設に足を運んでもらえるきっかけになれば」と願います。

24年10月にフィリピンで開催された「世界津波博物館会議」で本を紹介。ミャンマー出身で、東北大学大学院生のレイ・ソフィアさんにアドバイザーを受け、文章は英訳し、発表会用の資料作成やスピーチも英語で行いました。同年11月に仙台市で行われた国際会議「観光レジリエンスサミット」では市民向けに講演。本は制作中で「今の1年生が2年生になった際に引き継いでくれれば」と後輩がバトンを受け取ってくれることを期待しています。

左から2年生の伊藤哲さん、地主樹さん、高橋俊人さん。GS課題研究のアドバイザーを務める東北大学の大学院生レイ・ソフィアさん

3・11伝承ロード推進機構 震災伝承施設紀行

伝承ロードをゆく

第3回 福島県相馬郡新地町・相馬市・南相馬市

取材／一般財団法人3・11伝承ロード推進機構 事務局長 種市優

青森、岩手、宮城、福島の4県でツーリズムや、映像アーカイブなどの活動を行っている3・11伝承ロード推進機構の職員が「震災伝承施設」を直接取材。「3・11伝承ロード」の意義と役割を改めて考えながら、東日本大震災の教訓と災害への備えを学びます。



埼玉地区の震災被害と防災緑地整備の経緯を福島県相馬郡建設事務所企画調査課の植田啓太さん、高野あゆみさんに取材

記憶と感謝を後世へ

東日本大震災で津波被害を受けた各地域に整備されている「防災緑地」は将来、再び津波が発生したときにそのエネルギーを減衰させる緩衝帯として、また生態系の保全、地域の景観向上といった役割を果たしています。

震災伝承施設第2分類である新地町の「埼玉防災緑地」もその一つ。駐車場の傍らにかつて埼玉行政地区内にあり、津波に耐えて残った2本のクロマツ、1959年に建立された「防潮林造営記念碑」、明治



小学生がミカンを収穫する様子。2023年には500個以上、24年も300個以上を収穫したそうです。

期の地域の恩人をしのぶ「吉村宣徳先生碑」などが並びます。管理する福島県相馬郡建設事務所によると、この防災緑地が整備された新地町埼玉地域は震災の津波で壊滅的な被害を受けた地域。高台への集団移転に当たり、故郷の記憶を

「震災伝承施設」とは？



東日本大震災の事実や記憶、経験を伝承する「3.11伝承ロード」を構成する施設で①震災の教訓が理解できるもの、②震災時の防災に貢献できるもの、③震災の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、のいずれか1つ以上に該当することが条件。①～⑤1つ以上の条件を満たす施設を「第1分類」、加えて公共交通機関等の利便性が高かったり、近隣に駐車場があったりと、来訪者が訪問しやすい環境にある施設を「第2分類」、さらに案内員が配置されていたり、語り部活動が行われたりといった来訪者の理解しやすさに配慮している施設を「第3分類」としています。



- 1 埼玉防災緑地**
福島県相馬郡新地町大字埼玉崎外
間／福島県相馬郡建設事務所
TEL0244-26-1257
- 2 相馬市防災備蓄倉庫(相馬兵糧蔵)**
福島県相馬市坪田字宮東25
間／相馬市地方防災対策室
TEL0244-37-2121
- 3 南相馬市メモリアルパーク**
福島県南相馬市原町区北泉字
地蔵堂地内
間／南相馬市都市計画課
TEL0244-24-5251

忘れまいと地域の石碑を1カ所に集約したそうです。

同事務所とともに防災緑地の手入れを担っているのが会長 三宅信幸さんを中心とする地域団体「らちはまだいこの会」です。

和歌山県や高知県からの支援物資としてミカンが届けられたことを契機に、緑地北側に当時の福田小学校児童73名とともに73本のミカンの苗木を植樹。24年には第35回「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰を受賞しました。現在もミカンの育成に尽力し、毎年収穫に合わせて震災の経験と

復興支援の感謝の記憶を児童らに伝え続けています。

緑地の植樹にも参加した三菱電機東北支社や同郡山工場の社員も毎年草刈りなどの保全活動を継続しているといい、行政、住民、企業など多くの方々の手で美しい景観と伝承の場が守られていることを実感します。

「備え」の大切さを発信

続いて訪ねたのは、2013年に建てられた「相馬市防災備蓄倉庫(相馬兵糧蔵)」。同じく第2分類に登録されている震災伝承施設です。

物資運搬のみならず高齢者らの避難にも役立つリヤカーも防災用品の1つ



シダックスから寄贈されたキッチンカーは熊本地震などの被災地でも活躍しました



敷地内には、震災時に避難広報と避難誘導に当たり殉職した10名の消防団員をしのび、たたえる顕彰碑が建立されています



相馬市防災備蓄倉庫は「停電の場合も自家発電により3日間の電力供給が可能」とのこと

震災当時、相馬市の備蓄は毛布数百枚程度のみで食料や水が足りず、集中管理できる施設もなかったため支援物資の受け入れ・保管のために体育館や工場倉庫など市内10カ所の既存施設への分散を余儀なくされ、そこに人手も取られてしまいました。職員たちが災害対応そのものに集中できなかった反省や教訓を踏まえ、高速道路のICにもほど近い市の所有地にこの施設が造られました。

低温管理できる米貯蔵庫、レスキューポートといった施設設備とともに毛布や発電機、水用タンクなどの防災用品、食料、飲用水を備え、平時には炊き出し訓練などの防災研修の場として機能。

庫内には電動式移動ラックが並び「物資を搬入・搬出するため、相馬市の防災担当者や全員フォークリフトの免許を取得しています」と、地域防災対策室消防防災係長の齊藤浩司さん。相互応援協定を結ぶ自治体の非常時には支援物資の災害時は応援職員の宿泊受け入れ、支援物資を集約する「受援」拠点にもなっています。

「受援体制によって復興スピードは大きく変わります」と

強調するのは、相馬市観光協会職員で、市復興支援員・防災士も務める渋谷紀子さん。

先進的な取り組みを学ぼうと、視察や教育旅行に全国から自治体や自演会、議会、企業、学校が訪れているといい「皆さんに必ず伝えていっているのが、家族3日分を各家庭でも備蓄すること。見学して終わりではなく、地域防災や各家庭の備えを見直すきっかけにしてほしいと思っています」と語ります。

観光協会では一般に向けて倉庫の見学ツアーなども開催し「備え」の大切さを発信しているそうです。

維持管理の輪が拡大

南相馬市建設部都市計画課の山田昌宏さん、只野尚孝さんとともに訪れたのは「南相馬市メモリアルパーク」(第2分類)。「震災の記憶を未来へつなぐ」をコンセプトに、「震災の記憶を後世に伝承していく場所」として整備された市の施設です。

「ここはもともと津波で被災した住宅跡地。慰霊と鎮魂の思いも込め、海が眺められる



東日本大震災時の津波到達高である「11・1メートル」を標記したステンレス製のモニュメントの三角錐型は各面が「原町区」「鹿島区」「小高区」の3つのエリアを表しています

場所が選ばれました」と防災士でもある山田さん。緊急時には津波による二次避難場にもなるよう、車いすなどに利用できるスロープも整備。犠牲者名を記した石碑を「慰霊碑」ではなく、あえて「記銘碑」として残すことで記憶と教訓を後世に伝えていこうとしています。

日本有数のサーフスポットである北泉海岸の目の前ということもあって地域団体や企業が定期的に「ごみ拾いに訪れ、2024年には市内の小学校の教員グループによるボランティア活動も行われるなど、海岸保全と一体的にメモリアルパークの保存・維持管理に尽力する市民の輪は震災から14年経った現在も広がっています。

市民も観光客も立ち寄りやすい震災伝承施設だけに、多くの方々へ日常的な記憶の風化防止の啓発、観光や憩いを通じた学びの場にもなっているのだと感じました。



南相馬市メモリアルパークのタイトルは南相馬市の市章がモチーフ

記憶を残す
明日のために

風船に、思いをはせて

仙台市・HOPE FOR project

東日本大震災の翌年から、毎年3月11日に風船リリースを行ってきた「HOPE FOR project」は仙台市若林区荒浜とその周辺地区にゆかりのある若者らが主体の団体です。震災後に自分たちがどのような思いで過ごしてきたのかを集約したインタビュー集も発行。飾らない言葉でそれぞれの思いを伝えています。



震災遺構仙台市立荒浜小学校からリリースされた色とりどりの風船が青空に映える

荒浜地区には震災前、約800世帯、2200人が暮らしていました。津波で壊滅的な被害を受け、現在も残る建物は震災時に避難場所となった震災遺構仙台市立荒浜小学校だけ。「HOPE FOR Project」は毎年3月11日に同校で風船リリースと音楽イベントを実施しています。同団体は荒浜小と七郷小中の卒業生らが中心となって立ち上げました。代表の高山智行さんは震災遺構仙台市立荒浜小学校の職員でもありません。



風船リリースの後に校内で開かれる音楽イベント

「荒浜にはかつて営みや文化があった。震災でまちは移り変わっても、ここが故郷であるという思いが変わらず持っている方々がいます」と高山さん。「建物がなくなり灰色のようになったまちに色とりどりの風船を飛ばし、思いをはせる」ことを目的に2012年3月11日に風船リリースがスタート。「風船から種が落ちて海辺のまちに花が咲くように」と花の種も入れています。今年も3月11日の午後3時15分から風船リリース、午後4時から音楽イベントを開催。映画音楽作曲家として知られる世武裕子さんから荒浜に縁のあるアーティストによる音楽演奏があります。

演奏があります。

インタビュー集発行

荒浜の子どもたちが震災後、どのような思いで過ごしてきたのかを語るインタビューが同団体のウェブサイトで紹介されているほか、「声を抱う」と題して文庫版85ページの本にまとめ、24年に発行しました。震災時に7〜16歳の男性3人、女性4人と荒浜小学校長だった川村孝男さん（現・震災遺構仙台市立荒浜小学校職員）のインタビューを掲載しています。

高山さんは「甚大な被災地だった荒浜の出身というだけで、腫れ物のように扱われるのが嫌だったという人もいます。被災地、被災者という言葉でくくられるのではなく、あの日から今を懸命に生きていることが大切であり、今後もうこうした声なき声を抱い上げていきたい」と語ります。

所在地 / 宮城県仙台市若林区荒浜字新堀端32-1 (震災遺構仙台市立荒浜小学校)
TEL022-355-8517



2024年に発行した「声を抱う」の表紙

挑戦と成長を続け、常に進化

震災の伝承も使命・岩手県大船渡市



写真手前の建物は大船渡市魚市場。奥にキャッセン大船渡を含む商業エリアが広がります

岩手県の沿岸南部に位置する大船渡市は、美しいリアス海岸をはじめ豊かな自然が魅力。基幹産業は水産業で養殖が盛んですが、東日本大震災による大津波に襲われて養殖施設は壊滅。沿岸部の住宅街や商店街も甚大な被害を受けました。「元に戻すのではなく、新たなまちに」と復興を進め、今も「挑戦と成長」を続けています。



お話を伺った方
渕上清市長

震災による津波の最大波11・8メートルを記録した大船渡市の人的被害は、2025年1月現在、死者354人、行方不明者79人、関連死83人。建物被害は5592世帯で、全壊が2791棟、大規模半壊が430棟、半壊が717棟、

おわふなとし

一部損壊が1654棟。漁業関連施設の被害も甚大でした。

渕上市長は当時、同市議会議員に就任して4カ月。市役所庁舎の2階で議会議中に地震が発生しました。「非常に大きな横揺れが続く、建設から年月が経った庁舎にいるのは危険と感じ、皆で庁舎前の駐車場に避難しました。明治三陸、昭和三陸、チリの各地震災津波の教訓が語り継がれ、住民には地震が起きたら高台に逃げるという意識が根付いていました。今回も津波が来ると警戒しました」と振り返ります。

同市盛町の小高い地にある市庁舎をはじめ、公民館や学校への避難者は増加。震災当時は家業の代表も務めていましたが、自宅に近い上木町地域公民館を中心に避難者の誘導に専念しました。

阪神・淡路大震災の際、被災地で支援活動をした渕上市長は、暗闇が続く不安を体験



大船渡市防災学習館ではガイドによる案内も行っていきます

しながら市内を巡回しながらバルーンライト2台と大型発電機を見つけ、上木町地域公民館と指定避難所の盛小学校に運びました。電気工事士の資格を持つている人がいて、避難場所をとすことができました。

翌日、陸前高田市の惨状を上空から捉えたテレビニュースを見た渕上市長。大船渡の被害の全容は把握できないものの、非常事態の長期化を覚悟したと言います。

にぎわい生む新施設

震災後、復興の力になったのが国内外からのボランティアです。米国の団体「オールハンズ・ボランティアーズ」は11月頃まで常駐し、延べ約1100人が活動。「がれきの撤去や泥かきなど、大変助かりました」と感謝します。

市は津波で壊滅的な被害を受けたJR大船渡駅周辺を中心に、新たなまちづくりを進めました。そのシンボルとも

いえる商業施設「キャッセン大船渡」が17年に開業。飲食や物販など約30軒が集まっています。周辺にはショッピングセンターやホテル、ライダーの休憩所「バイクの駅大船渡」なども誕生し、にぎわいを創出。21年に三陸沿岸道路の仙台―八戸間が全線開通したことにより、市外からの観光客の増加が期待されています。

渕上市長は市議会議長を経て、22年に市長選で初当選。地元資本の企業が多く集まる大船渡だからこそ「現場主義」を強調し、「今後も変わり続けないといけません。挑戦と成長を大切にまちづくりを行います。例えば漁業なら、水揚げの再開で良しとせず、水産物を生かした商品開発など新たな展開に目を向けていきます」と力を込めます。

震災の伝承も重視。24年3月、犠牲者の追悼と震災の風化を防いで教訓にするため、みなと公園に「祈りのモニユメント」を設置しました。震災時は避難所としても機能した漁村センターに市防災学習館を開設。キャッセン大船渡エリアでは、スマートフォンを活用した震災関連の学習プログラムの提供をしています。

三陸道に新たな拠点 防災機能も兼ね備える

道の駅東松島

三陸沿岸道路・矢本パーキングエリア(PA)上り線に直結し、「道の駅東松島」が2024年11月にオープンしました。東松島市で初めての大型観光物産施設として、三陸道利用者はもちろん一般道とも結ばれているので多くの市民が来場し、にぎわいを見せています。風光明媚な高台に位置し、眺望の良さも自慢です。



一般道路からもアクセスできる「道の駅東松島」

道の駅は地域振興施設、道路休憩施設、コンビニエンスストア棟の三つで、延べ床面積は計2216・79平方メートル。駐車台数は矢本PA上り線178台、施設南側の一般道用が137台。三陸道の下り線利用者は矢本インターチェンジから一般道を経由し約5分で道の駅に着きます。地元ならではの産品や飲食の販売はもちろん、石巻圏域の観光・物産の情報発信基地としての役割も担います。

メインの地域振興施設は市内にある航空自衛隊松島基地のブルーインパルスの格納

庫をイメージした外観。1階の物販コーナーでは地場産の農産物や加工品、土産、友好都市の東根市と蔵王町の特産品などを豊富に取りそろえています。

2階は約100席を用意したフードコート。東松島市特産のカキやのりを使ったうどんやラーメンなどが味わえます。「東松島ブルー」のソフトクリームを食べながら、デッキから望む市内中心部や石巻方面、松島基地、その背後に広がる太平洋の風景を楽しめます。



地場産品はもちろん友好都市の特産品も販売



ブルーインパルススタッフの前に立つ駅長の小山さん

伝承館と連携目指す

道の駅は第3セクターの東松島観光物産公社が管理・運営を担います。代表取締役で駅長も兼ねる小山修さんは前副市長。市職員として長年勤め、復興政策部長や総務部長も歴任し、震災復興を支えました。副市長と代表取締役は兼任でしたが、道の駅に力を注ぐと副市長を辞しました。

「コンパクトな施設だけに、ちよつとした休憩や買い物に最適で、ブルーインパルスグッズをはじめ商品も手頃な価格。おかげさまで来館者の回転率が良く、開業から1カ月足らずで10万人を達成しました」と小山さん。

道路休憩施設にはVR(仮想現実)でブルーインパルスの搭乗を体験できる機器がずらり。休日には長蛇の列ができるほど人気です(利用は協力金300円が必要)。防災備蓄倉

庫もあり、道の駅全体が高台なので一時避難所としての機能も兼ねています。同会社は他にも、野蒜地区にある東松島市震災復興伝承館の管理・運営を行っています。小山さんは「震災では東松島も大きな被害を受けました。道の駅を観光は 물론、被災地見学の拠点にもすべく、伝承館との連携を図りたい」と話しています。



所在地/宮城県東松島市小松字上二間堀112-5
TEL0225-25-6301

東松島市の震災伝承施設

第3分類(訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解のしやすさに配慮した施設)、第2分類(公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設)のみ紹介。

- 第3分類 ● 東松島市 東日本大震災復興祈念公園 (東松島市震災復興伝承館含む)
東松島市野蒜字北余景56-36
- 第2分類 ● はなはなプロジェクト 浪分樓第11号
東松島市野蒜字後沢地内

台湾の若者が被災地で研修

宮城県・南三陸町国際交流協会理事の佐藤さん

東日本大震災の被災地では国外、特に台湾から物資両面にわたる多大な支援を受けました。南三陸町は病院再建に台湾からの多額な義援金が充てられたことをきっかけに、同町と台湾の若者を中心とした交流がスタート。震災前から町内に住み、南三陸町国際交流協会理事を務める台湾出身の佐藤金枝さんは、町と台湾を結ぶ心懸け橋として交流活動に取り組んでいます。



佐藤金枝さん

台湾が南三陸町で脚光を浴びたのは病院の再建における多大な支援です。再建には費用面をはじめ、さまざまな課題がありました。台湾紅十字（赤十字）会を通じて総事業費の約4割に当たる義援金が寄せられ2015年12月に「南三陸病院・総合ケアセンター南三陸」がオープンしたのです。

町内の高校生も訪台

南三陸町では台湾との永続的な交流を図ろうと、高校生や大学生らの研修旅行やインターンを積極的に受け入れています。15年12月に第1陣が来町以来、南三陸町国際交流協会も受け入れをした際の協力団体の一つとなり、佐藤さんは通訳や案内役として活躍

してきました。家族は無事で避難所や仮設住宅での生活となりました。志津川には日本人と結婚した外国出身の女性が他にも暮らし、「皆、この町を離れたくないと思う反面、これからどうなるのかという不安と葛藤があったと思います。子のいる母親はなおのこと。母国に避難するにも「ここからどうやって」と振り返ります。震災後は外国人出身者向けの日本語教室を再開し、震災パネルの翻訳作業にも当

っています。

台湾の若者たちは滞在中、震災伝承施設の見学や講話を通じて被害の大きさや教訓を学ぶのはもちろん、ホームステイも体験し、町民との交流を図っています。南三陸町震災復興祈念公園を見学した高校生がテレビのインタビューで答えた「この地で見たこと、感じたこと、教わったことを両親や周りの人に伝えたい」との話が印象的です。

コロナ禍では往来がストップしましたが、オンライン交流を継続。コロナが一段落した今は旅行が復活し、南三陸町でも3回目の台湾派遣交流事業として24年10月28日から4泊5日で町内の高校生14人が訪台。現地の高校生と交流しました。

「南三陸町に限らず東北地方は台湾ではあまり知られていません。景色は良いし温泉もあり、震災伝承施設という台湾の皆さんにも足を運んでほしい場所があります」と佐藤さん。「小中学生の交流も図りたい。台湾の若者の受け入れを通じ、南三陸町の子どもたちももっと視野を広げ、海外に興味を持ってもらえたら」と期待します。



佐藤町長(左から5人目)らが出席した「日台防災協カウイクin台湾高雄」【写真提供:南三陸町商工観光課】

今年1月9日、台湾南部の高雄市にある国立高雄大学で開かれた「日台防災協力ウィークin台湾高雄」に南三陸町の佐藤仁町長ら登壇者を含め10人が出席し、佐藤さんも通訳として同行。セミナーでは佐藤町長が自然との共生を踏まえ、復興に向けたまちづくりの足跡を説明しました。「台湾は日本と同様に島国で大地震が頻発しています。東日本大震災で得た知見や教訓は台湾でも共有すべき」と佐藤さん。台北市出身で1994年に留学生として仙台を訪れ、その後結婚を機に現在の南三陸町志津川に住み始めました。

震災で自宅は津波で流失し



台湾から研修旅行に来た生徒らを案内する佐藤さん(左)【写真提供:南三陸町観光協会】

一般財団法人3.11伝承ロード推進機構 New Destination プラン(3年間の業務報告)

東日本大震災からの10年を契機に、新たな復興ステージのアクションとして、全359[※]に及ぶ三陸沿岸道路を活用し、各地の観光コンテンツと震災伝承施設を融合させることで「三陸沿岸地域の新たな交流人口創出に向けた未来志向の地域活性化を図る」ことを目的とし、「3.11伝承ロード New Destinationプラン」を3年間にわたり事業に取り組んできました。

効率的な事業展開を図るため、事業内容を検討するための組織として、観光事業者やマスコミ、学識者など15人で構成する「三陸沿岸地域道路エリア活性化検討会」を立ち上げ、公開の場で5回にわたり開催しました。

事業では旅行・観光・防災学習コンテンツの創出の一環として、新たな視点から付加価値のあるツアープログラムの開発を検討し、観光地訪問や被災関連施設視察など、それぞれの目的を融合したハイブリッド型の東北エリアツーリズムを目指しました。

初年度は、現況調査の一環として地域の資源を把握し、

自治体のヒアリングを行いました。2年目にはウェブアンケート、モデルルートの設定、モニターツアーを実施。3年目は、情報発信を中心に捉え、これまで実施した事業の紹介も含めて、二つの地域でフォーラムを開催し、三陸地域の紹介動画を作成しました。

最後となる5回目の活性化検討会において、3年間の振り返りを行い、委員の方々から感謝の言葉が寄せられました。座長の奥村先生(東北大学災害科学国際研究所)からは「この成果は機構だけではなく、委員の皆さんが活用し、三陸沿岸の活性化につなげなければならない」との言葉をいただき、この事業の重要性を改めて共有できたと感じています。

また、前述しました紹介動画「震災伝承施設を巡る 三陸縦断旅」は、当機構ウェブサイトとYouTubeチャンネルで公開しています。

ぜひご覧ください。





三陸縦断旅

震災伝承施設を巡る

震災伝承施設を巡る 三陸縦断旅 🔍

映像をご覧になる場合は、こちらの二次元コードをスマートフォンで読み込むか、以下のように検索ください。



表紙

被災地を歩く

天へ昇る姿は復興の象徴

岩井崎龍の松(気仙沼市)

三陸復興国立公園を代表する景勝地の一つ、気仙沼市の岩井崎は約2億5000万年前のペルム紀化石が露出していることで知られる。地層には数十種に及ぶ化石を豊富に含み、当時の環境や生物の進化を知る上でとても貴重な。三陸ジオパークのジオサイトであり、みちのく潮風トレイルのルートにもなっている。

長い年月をかけて海水によって浸食された石灰質の岩の割れ目から潮が吹き上がる「潮吹岩」とともに、岩井崎の先端部に立つ「龍の松」が有名だ。東日本大震災の津波によって幹や枝などに被害を受けたものの、一部が奇跡的に残り、その姿が龍に見えることから、龍の松と名付けられた。傷みが激しく、一時は枯死状態となったが、長く保存するための処置をしようと、2015年7月から部分ごとに切断し京都に運ばれた。加工を施し16年2月には、現在の場所に設置。「岩井崎龍の松」として第2分類の震災伝承施設

設になっている。

岩井崎周辺は津波で甚大な被害を受けた。近くにある気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館では校舎4階床まで津波が到達。車やがれきが流れ込んだままの状態に残され、この地の被害のすごさをまざまざと実感できる。

震災から14年。龍の松は高さ約2.5^m、幹周り約1.7^mで堂々と太平洋を見渡し、天へ昇ろうとする龍のような姿は気仙沼の復興のシンボル、希望の象徴とともに自然の造形美も感じさせる天然のモニュメントといえる。

